

「地産地消のエネルギー」

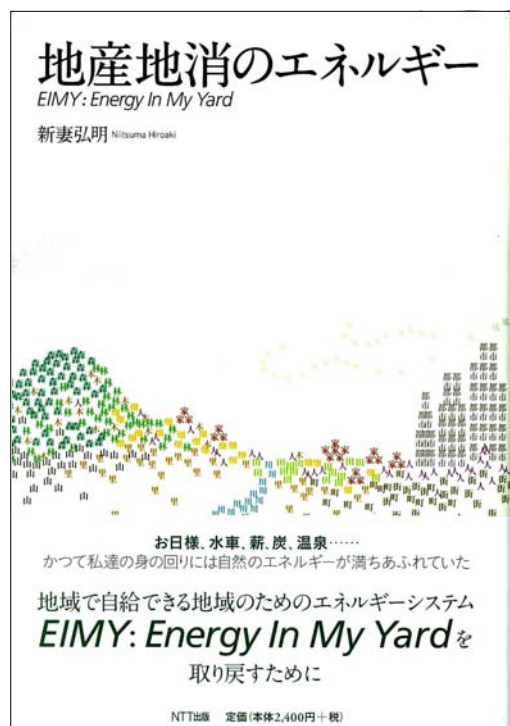
EIMY: Energy in My Yard」 (NTT出版) まえがきより

近代科学技術と市場原理によって引き起こされた地球規模の環境問題は、近未来の文明の崩壊を現実味のあるものになっている。それは、単なる工業界や社会システムの低炭素化では到底すまされるものではなく、文明のかたちそのものの見直しを早急に必要としている。

環境問題は、人間社会と環境との共生の問題である。そしてそれは、地球上のそれぞれの人間社会とそれぞれの環境との共生の問題である。そこに住む人々の文化が異なれば、異なった環境問題がおき、風土が異なれば、また異なった環境問題になる。地球環境問題は、この地域々々の環境問題の総体としてあるにすぎない。地球環境問題を考えるとき、地球上のそれぞれの地域がいかにか環境と共生した文明のかたちを再構築していくかという問題こそが重要である。

我が国では、人類は縄文時代以来の長い歴史の中で、我が国の自然と適合した文明社会を築きあげ、それをつい数十年前まで存続させてきた。しかし、我が国の地域々々で育まれてきた、この環境と適合した文明のかたちは、化石燃料と市場原理の席卷により持続不可能なものに大きく変貌してしまった。そればかりではない。我が国の国土面積の大部分を占める、農山漁村、そして地方都市では、そこかしこにあった生業が消滅し、住む人さえもいなくなりつつある。持続可能な社会の根源である食糧、水、エネルギー、資源が存在する地域社会を離れ、人々は自然とは隔離された大都市に集中してきている。そして、文明が適合すべき、共生すべき地域の環境に直接接することを生業やライフスタイルとしない人々が大半を占める異常な社会になってしまっている。

環境に適合した文明のかたちを考えると、地域、特に、今人々がそこから離れつつある地域に焦点をあてることは必然である。そして、そこにはつい数10年前までは数千年の実績を持つ持続可能な文明社会のお手本が厳然として存在していたのである。



私は、エネルギーの地産地消、すなわち、地域のエネルギー・資源を地域のために活かす文明のかたちである“*EIMY*”の概念を2002年に提唱し、それ以来、今は消滅してしまった古来の*EIMY*のしくみや、地域のエネルギーの利活用による地域の活性化の道を探るために、いくつかの地域で身の丈の実践研究を行ってきた。エネルギーの自給というものを見つめるこれらの活動を通して、人類が存続できる目安であるCO₂排出80%削減の社会は、単なるハードウェアの開発や宇宙船技術だけでは到底実現できるものではなく、現代文明の持つ深い淵を覗かずに、それを考えることはできないということを実感してきた。

私がいろいろなところで*EIMY*の話をするたびに、何か*EIMY*のことを書いてある本はありませんか、参考資料はありませんか、と聞かれる。もとより環境問題に権威者はいない。私の*EIMY*の思索も実践も試行錯誤の連続である。本書は、戦後の高度経済成長期に育った理系人間の私が、地域のエネルギー自給というものを見つめるなかで意識変革していく漂流の自伝である。本書が、それぞれの地域で地域の行く末を考えている方々、環境共生社会実現のために日々努力されている方々のための何らかの糧になれば幸いである。

以上のまえがきを含む本書を書き上げたのは2009年8月であった。その後諸般の事情で出版が遅れるうち、2011年3月11日、東日本大震災とそれに続く東京電力福島第一原子力発電所の重大事故が発生し、私も沿岸部の惨状に比べれば些少ではあるが仙台で被災した。

この度の震災では、長期間、電気、ガス、水道、石油、食糧等のライフラインが断たれ、本書の主題の一つである、生産と生活がお金を介してしかつながない「切り身社会」の脆弱さを露呈した。また、便利でこういうときこそ役立つはずの携帯電話が、中継局の被災や充電できない等の理由で、仙台市内にあっても役にたたず、たのみの公衆電話も、携帯電話の普及により、方々でその姿を消した後であった。高度なメーカから与えられ、みずからは手を下すことができないハイテクに依存した現代社会のもろさを象徴した事象であった。

我が家では、このような状況の下、飲用以外は裏山の沢水を汲み、また、折からの寒さの中、薪ストーブが大活躍した。ライフラインの源と生活が直接つながり、みずからの工夫と労働によりそれを利活用することができる安心感と豊かさ、まさに*EIMY*の大切さとありがたさがはからずも実証されてしまった。

現在、被災地では力強い復興の活動が始まっている。そこでは地域の力が原動力となっている。復興はそれを行えば現在より必ず良い方向に動き、それが人々にさらに力を与えてくれる。大戦後何もないなかで始まった10数年間の、世の中と人々の希望と明るさはそのためだったのかも知れない。自然はときには苛酷であるがその半面やさしさもある。

それに対して、巨大なエネルギーシステムである原発の事故は被災地に大きな影を落している。行方不明になった家族の捜索もままならず、地域からの退去を余儀なくされている人々、土とともに生き、我々の食べ物の生産を生業としてきた人々の心を思うとやりきれない。壊れた人工物にやさしさはない。効率を追求し、高度で複雑な社会インフラの相互依存により成り立っている巨大システムと、それらに支えられている現代文明社会の脆弱さと怖さを我々は思い知らされた。

今回の震災は1000年に一度のものであり、その復興には数10年単位の時間とあらゆる叡知を必要とする。これは一つの歴史の節目であり、また現代文明の分岐点である。我が国のエネルギー政策はもとより、行政や社会のしくみと体質、ひいては文明のかたちまでを見直すべきときである。復興は、単なる震災前の社会の復元ではなく、国土の主構成要素としての東北の役割を見つめ

なおし、現在我が国が抱えている、過疎高齢化村落、地方都市の衰退と大都市への過度の人口の集中、農業問題、食糧・エネルギーセキュリティ、地域コミュニティ、東北の歴史・伝統・文化・風土、地域経済・産業、安全・安心、地域医療、救急医療、地方教育、環境問題、こころの問題等あらゆる問題を包括的に、あらゆる組織が総力を上げて取組み、東北と我が国の復興と再生、そして新たな文明社会への転換に務めるべきである。

本書はこのような歴史の節目の前に書かれたものであるが、そのままの形で世に出そうと思う。なぜなら、本書は地域のエネルギー・資源を地域で利活用することの大切さと豊かさを主眼とはしているが、それは現代文明社会の脆弱さと怖さを背景にしているからである。また、本書で述べている地域社会再生の視点は、今後の被災地域の復興のみならず、現代文明社会の転換に有用な示唆に富むものと自負するからである。